

# 瀉下薬エイジツは陶弘景の勘違いからわが国で発生した民間薬である

帝京大学薬学部附属薬用植物園・創薬資源学研究室  
木下 武司

## 1. はじめに

現行薬局方は生薬エイジツ(営実)の基原をバラ科ノイバラの偽果又は(真正)果実とする。瀉下を目的とする家伝薬に配合され、漢方でも本朝経験方に営実湯(『勿誤薬室方函』)があり、これも瀉法の薬方として知られる。営実は『神農本草經』(以下、本經)以来の歴代中国本草に必ず収載される品目であるが、意外なことに中国には瀉下薬という認識はどこにも見当たらず、わが国で発生したと考えざるを得ない。本講演では営実がどのような経緯で瀉下薬として発生したのか、和漢の医書・本草書を詳細に考証し、その歴史的経緯を明らかにする。

## 2. エイジツには玉営実と営実仁の2型がある

ノイバラは分離雌ずいをもち1つの花に多数の子房がある。通例、このタイプは各子房が果実となるので集合果を形成するが、ノイバラの分離雌ずいは1心皮なので各花柱が互いにゆるく合着して柱状に肥厚し、子房の基部はつぼ状の花床の中で基底から側壁にかけてつく。子房の成熟とともに花床が肥大し、その内部に多数の種子のような果実(真正果実)が形成される。すなわち、ノイバラの果実は子房と花床から形成される偽果(集合果)であるが、花床によって球状に覆われるので見かけ上は一果のように見え、これを玉営実という。これを縦あるいは横切りすると、背面に毛茸と称する銀白色の剛毛が叢生する真正果実が5個から10数個放射状に配座する。ノイバラの真正果実は種皮と果皮が分離しやすい堅果であり、これを営実仁と区別する。瀉下活性成分が局在するので、営実仁の薬効(比活性)は玉営実よりずっと強い。

## 3. 営実の異名と薬用部位について

本經に營實一名牆薇一名牆麻一名牛棘とあるように、営実には古くから薔薇(=牆薇、薔藤・牆薇とも表記)という別名がある。『本草綱目』は両名を併記した營實牆藤を項目名とする。中国歴代医書のほとんどは別名の薔薇を使い、営実の名を用いることは少なく、あっても多くは営実根あるいは営実とあっても薬用部位として根を指定する。すなわち、営実は基原植物ノイバラそのものを表す名であって、営という植物の果実の意ではないのである。

## 4. 営実をノイバラの実としたのは陶弘景の勘違いである

営実について本經および『名醫別錄』(以下、別錄)のいずれも癰疽・悪瘡など外科の効能に言及するが、別錄は明確に根を薬用部位に指定する。気味・薬性については、本經の酸・温に対して別錄は微寒・無毒とし、およそ同物とは思えないきわだった違いがある。本經の酸・温はノイバラの果実の気味・薬性として妥当にみえるが、本經・別錄の原本・写本のいずれも散佚し、今日に知られるものは六朝梁の陶弘景が両書を統合して注釈を加えた『神農本草經集注』(以下、本草經集注)に由来することに留意する必要がある。すなわち、本經・別錄の記述がちぐはぐなのは陶弘景が手を加えたためと仮定すれば辻褄が合うのである。営実の名からつい無意

識に薬用部位を果実と連想してしまうが、本經本来の薬用部位は根であり、「營實は即ち是れ牆薇の子なり」とした陶景注(『證類本草』所引)を陶弘景の勘違いと仮定すれば、營實が本經上品に収載され(一般に瀉下薬は下品)、大半の医書が根を薬用とすることに対する疑問が氷解する。陶弘景の見解は歴代漢籍医書で支持されなかったが、平安初期までのわが国では陶景注が絶対的見解として受け入れられ、營實の基原はノイバラの実とされた。

## 5. 營實の瀉下作用はいつから知られていたか

1773年に刊行された木村兼葭堂校定『河内屋喜兵衛板大同類聚方』はムバラ実を配合シクソフセヤミ(便秘)に用いるチクマヒ薬なる薬方を収載する。『大同類聚方』は長らくその存在が不明で散佚したと思われていたが、江戸中期に突如出現し、和方医学の聖典とされた。半世紀後の1823年、宇佐美主膳は『營實新效方』を著し、瀉下薬營實の臨床治験例を多く記載した。今日、『大同類聚方』を偽書とする見解が圧倒的に優勢であるが、時代的背景から『營實新效方』に与えた影響は否定できず、両書が刊行される以前から、わが国で營實の瀉下作用が知られ伝承されてきたことは間違いない。確実な文献では1184年の『長生療養方』に「私云利湯と云は諸の瀉薬の湯なり。所謂桃皮營實等は只両三沸煮なる湯なり。」とあるのがもっとも古い。營實を牆薇の実と記述した『本草經集注』は平安初期まで標準テキストとして利用されたから、もっと古くからノイバラの実の瀉下作用が気付かれていたとしても不思議ではない。『萬葉集』に「枳のうばら刈り除け倉建てむ尿遠くまれ櫛造る刀自」(巻16 3832)なる戯れ歌がある。第三句～五句はクラ・クソ・クシと「く」で始まり、技巧を凝らした歌である。歌の意は「イバラを刈り払って倉を建てたいからクソするなら遠くでやっってくださいよ、櫛を作っているおかみさんよ」という実に尾籠な内容であるが、「うばら」の実が瀉下薬、少なくとも下痢を起こすことが知られていたとすれば、クソと「枳のうばら」の相関が成立し、この歌の全句が技巧的に統一されることになる。鎌倉中期に成立した『沙石集』にあるツバメに喩えて人の嫉妬心を戒める説話で「うばらの実を食はせて、みな殺しつ」とあるのはノイバラの実に激しい作用のあることを示唆する。したがって、ノイバラの実に瀉下作用の有ることはわが国でかなり古くから知られていたと考えて差し支えない。

## 6. 營實仁の発生経緯は？

『聖濟總録』に糞實一味からなる糞實散という処方がある。この糞實の注にヤナギ製臼で磨り“黄肉”を篩い取るとある。この処方は『本草綱目』にも引用されるが、李時珍は苗實すなわちアオイ科イチビの実とした。糞實散は瀉下の薬方ではないので、李時珍の見解は妥当であるが、糞は營に通じるのでわが国では營實と解釈され、その結果として營實仁(黄肉に相当)を得て、玉營実と比べて瀉下活性が強いことから瀉下薬として用いられるようになったと考えられる。

## 7. まとめ

宇佐美主膳は民間に細々と伝承されたノイバラの薬方を研究した結果を『營實新效方』にまとめ、その知見は『掌中妙薬奇方』、『妙薬奇覧』、『寒郷良劑』などの医書に取り入れられた。江戸中期は、今日のサプリメントに近いものから本格的な治療薬まで、多様な売薬が出現、親試実証主義に基づく古方派漢方が台頭し、中国医学の經典に準拠しなくても、効き目さえ確かであれば臨床に使うという風潮があった。瀉下薬營實はかかる状況の下で発生したと考えられる。